



164号

2011/6/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



甲居集落(四川省甘孜州丹巴県)

2009年5月

撮影:大川健三(四姑娘山自然保護区管理局特別顧問)

### ‘わんりい’ 164号の主な目次

北京雑感(55)北京の電力消費	2
私が調べた諺&慣用句(3)「百聞は一見にしかず」	3
媛媛讲故事(35)怪異シリーズ③定婚店	4
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	6
アジアを読む(77)「地下鉄(メトロ)に乗って」	6
フィールドノートの走り書き⑨	7
西安うろうろ歩き(2010)Ⅱ	10
中国-城市(都市)めぐり(6) 烏魯木齊市	12
福建見聞録(7)福州で知り合った心優しき人々	14
私の四川省一人旅(46)理塘の街で⑥神の岩山と鳥葬の丘	15
スリランカ紹介(48)スリランカのお酒	19
アフリカとの出会い(53)「ヒッチハイク万歳」	20
映画「テザ-慟哭の大地」(試写会より)	21
わんりい 掲示板	21
わんりい 活動報告「漢詩の会」	22

**【表紙写真説明】** 成都から車に乗り、パンダで知られた臥龍鎮、四姑娘山登山基地・日隆鎮を抜け、更に西に120km進むと四川省西部を流れる大渡河が4つの支流に分かれる交通の要所の町・丹巴があります。

甲居集落は、丹巴から大渡河の支流・大金沙江に沿って北に約10分ほど上ったところにあるギャロン・チベット族の集落で、広い緩斜面に民家が点在し、小麦や梨、リンゴ等が豊かに実り、この地方の伝統文化も良く残っている美しい場所です。

写真に写っている建造物はこの辺りの民家で、民家の彩色や平屋根の四隅の尖りは魔除けで、外に向かって開かれた家屋の構造と共にこの地方の建物の特徴です。

秋の収穫時には平屋根に黄色いトウモロコシが並べられ、冬になると骨付きの豚肉が軒先に吊されます。

(大川)

福島原発事故に続いて、浜岡原子炉の停止が決まって、発電方法の再考と同時に、我々消費者の節電マインドが問われています。節電生活の参考になるかどうか、北京の電力消費スタイルをご紹介します。

初めて北京で生活するようになったのは、21世紀になったばかりの頃でした。その時に同居させていただいた所は、大学構内の住宅街区でした。大学構内と言っても、4万人近い人々が生活する一つの町のようなところで、住宅街区も幾つかに別れて、「東楼」・「中楼」・「西楼」、ほかに「○○楼」と名前の付いたところもありました。この場合の「楼」と言うのは、建物一棟ではなく、集合住宅の建物が十棟以上建っていて、周りにフェンスを廻らし、街中の小区と同じ役割をする、「棟=小区」という構成です。

住居表示は、「東○○楼○○单元○○号室」となります。このうち「单元」と言うのは、建物の階段の入口を指します。昔の建物は、建物に3、4箇所、時には5箇所以上の入口があり、各階段の各階両側の住宅、1階左側の101号室から5階右側の502号室まで10軒が同じ单元となります。それで、先の表示で「東楼何号棟の何番目の階段の何階」と分かる仕組みです。

当時の北京は、東京に比べて、町全体の明りが少なく暗い印象でした。家の中の電球は60Wが多く、時には40Wの電球も使っていましたが、慣れたらあまり不自由は感じませんでした。街灯も少なく、光が弱いので、ムードは有るのですが、夜道を歩くのには神経を使いました。その頃の道は舗装が破けていたり、歩道に敷き詰めたコンクリートブロックの角が突き出たり沈み込んでいたりして、慣れないうちはよく躓いていました。

建物にたどり着いてやれやれと思ったのに、入口が真っ暗で、はたと立ち止まってしまいましたが、北京の人々は慣れたものでそのままずんずん歩を運びます。建物に足を踏み入れると、その振動で階段室の電灯が自動点灯します。光源は天井に取り付けた裸電球で、あまり明るくはないのですが、階段を上るのには充分です。階段を登って行くと、踊り場の2、3段手前で上の踊り場の電気がつきます。

踊り場で一息ついて下を覗くと、もう下の踊り場の電気は消えています。徹底した省エネに感心しました。この電灯、昼間は点かないので、埃っぽい階段の天井にぼつんとあって、ちょっと頼りなげなのですが、夜には頼もしい存在になります。ほんの時たま壊れて点かないときがありますが、北京のほかの施設の故障の頻度と比べると、かなり信頼性の高い装置でした。

このシステム、古い住宅では今もそのまま(電球は少し

明るくなったような気がします)使っていますが、新しい高層マンションの入口などではもう使われておらず、内部廊下のごく一部で利用されているだけのようです。

昔と比べると随分明るくなったマンションですが、北京の節電精神は生きているようです。北京の高級マンション生活には、日本で見られる電化製品は全部揃っています。それどころか、水道水が飲めない北京では、熱湯と冷水のコックを持った「鉱泉水」の給水機が一家に一台必ずあります。24時間付けっぱなしの家庭も多いようです。日本と余り変わらない電気使用量ですが、電気代はプリペイドです。

プリペイドカードを、日本の検針器のようなところへ差し込むと、電気が使えるようになります。ある金曜日の夜、突然電気が消えてしまいました。以前は予告なしの停電が度々ありましたが、その頃はもう殆ど無くなっていたのに、突然の停電で、何か事故でもあったのかと窓の外を覗くと、外はいつもと変わらない様子で明かりが点いていました。

この時になって、友人が「しまった!」という顔をしました。電気料金のプリペイドカード更新を忘れていたのだそうです。しかも今日は金曜日。カードを取り扱う窓口は土曜日曜休みだそうで、これから2日半は、家の中の電気が完全にストップです。冷蔵庫は開閉ができないようにガムテープで留めてしまいました。金曜日の夕食から月曜日の朝食まで、食事は全部外食です。中国では朝食を外で食べるのは普通ですから、何の不自由も無く過ごしましたが、日中何も出来ないのには閉口しました。

日本では、電気料金の支払期限が過ぎても、引き落としが出来なくても、即電気が止まるということはありませんが、この点、北京はとてもしビアで、前払いの料金を使い果たすと、補充するまで電気は使えません。

この制度、北京の電気料金徴収率が低いので取り入れられたそうですが、人々は、普段から電気の使用可能量をチェックして、知らず知らず節電を心掛けるようになっていきます。私の友人のようにカードの更新を忘れる人にとっては、ちょっと不便ですが、一般人にとってはなかなかいい方法のように思えます。市役所の方でも電気料金の徴収漏れが無い、正に一挙両得の制度のようです。

今、中国では国民の生活水準が向上するにつれて、電力不足が深刻になって来ているようですが、同時に奥地への配電地域拡大も進めなければなりません。最近、奥地へは送電線の設置に替えて、太陽光熱利用の発電装置を運んで、地域毎の小規模発電を試行する動きがあるようです。発電所の不要なこの方法は、環境に優しい電化方法ですから、是非推進して欲しいと思います。

# 百聞は一見にしかず

三澤 統

私の調べた諺・慣用句 — 3

私達は口では旨く伝え難いなにかある物を他人に説明するとき、「いろいろ口で言っても良く分からないと思うから、とにかく実際に一度本物を見て下さい、百聞は一見にしかず ですから。」などと言います。

実はこの”百聞は一見にしかず”も謂われは中国の故事にありました。

この成語の出自は、漢書<sup>1)</sup>・趙充国(ちょうじゅうこく<sup>2)</sup>伝で、「百聞不如一见，兵难遥度，臣愿驰至金城，图上方略」(百聞は一見にしかず。前線の状況は遠くからはよくわからないので、私自身が金城に行き、図にして戦略を奉りましよう)の部分です。

西漢の宣帝の時代、チャン族が国境に侵入し都市を攻め落として土地を略奪し、家を焼き払い人を殺し金品を奪いました。宣帝は直ちに群臣を集めて相談し、誰か兵を従えて敵と戦う者はいないかと尋ねました。

すると、齢70に余る老将の趙充国が自分がその重責を果たしましょうと自ら進んで買って出ました。そこで宣帝がどの位の兵馬が必要かと聞いたところ、彼は「人の言うことを百遍聞くよりも、一度自分の目で実際に見る方が良く分かります。前線の状況は遠くからでは良く分からないので、私が自ら行ってみたいと思います。その上で攻守の計画を策定して、作戦地図を画いて陛下に上奏いたします」

宣帝は彼の意見に同意して趙充国に人・馬一隊を預けて出発させました。隊は黄河を渡った後、しばらく行くとチャン軍の一部隊と出会いました。趙充国は攻撃命令を下し、たちまち大勢の敵を捕虜にしました。

兵たちは勝ちに乗じて更に進撃しようとしたが、趙充国はそれを押しとどめて言いました。

「我が軍は万里をも遠しとせずこの地までやって来たが、やはり兵馬も疲労しているだろうから深追いはやめたほうが良い。万一敵の待ち伏せ攻撃にでも出会ったら、やられてしまうかもしれないではないか。」

兵達はこれを聞いて、この老将の思慮深さと決断力の素晴らしさに敬服しないものはいませんでした。趙充国は地形を偵察し、さらに捕虜にした敵兵の口から、敵の内部の状況を聞き出し、敵軍の兵力や部署を調べ上げた後、兵を駐屯させ守備を固め、国境を整備しチャン族の策略を分裂瓦解させる計画を立てて、宣



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

帝に上奏しました。

ほどなく、チャン族の侵略、騷擾<sup>そうじょう</sup>は朝廷によって平定され、西北の国境は安定したのでした。

## 〈注記〉

1.漢書(かんじょ):中国後漢の章帝の時に班固、班昭らによって編纂された前漢のことを記した歴史書。二十四史の一つ。「本紀」12巻、「列伝」70巻、「表」8巻、「志」10巻の計100巻から成る紀伝体で、前漢の成立から王莽政権までについて書かれた。後漢書との対比から前漢書ともいう。

『史記』が通史であるのに対し、漢書は初めて断代史(一つの王朝に区切った歴史書)の形式をとった歴史書である。『漢書』の形式は、後の正史編纂の規範となった。

2.趙充国(ちょうじゅうこく):紀元前137年-紀元前52年)は、前漢の將軍。字は翁孫。隴西郡上邽の人で、後に金城郡令居に移住した。

注記1, 2, ウィキペディア フリー百科辞典より

‘わりりい’ 入会をご希望される皆様へ

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりりい’

‘わりりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃってる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わりりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

「月下老人」は、縁むすびの神であるということを知らない人は少ないでしょう。でも「月下老人」が縁結びの神になった謂われをご存知でしょうか。それは唐の物語から始まりました。

長安の南の郊外に杜陵原と呼ばれるところがあります。韋固という人は、その杜陵原で生まれましたが、少年の頃、両親を亡くし淋しい日々を送って育ちました。韋固は成長し、早めにお嫁さんを貰い跡継ぎを得て家族のいない淋しい生活に終止符を打ちたいと思っていましたがなかなか丁度いい相手に恵まれませんでした。

元和(唐代の年号、西暦806～820年)2年のある時、韋固は河北省の清河へ遊歴に出かけました。その途中、河南省の宋城<sup>1)</sup>の南の方角にある旅館に泊まりました。そこへ知り合いが、清河郡の元の司馬<sup>2)</sup>・藩昉の娘との縁談を携えて訪ねてきました。そして、知人が翌日の朝、旅館の西の竜興寺の門のところにその娘を連れてくるというので、そこで待ち合わせることを約束しました。

韋固は早く結婚したいといつも思っていましたので、若しかすると今度は良い縁談に恵まれるかもしれないと思いき、なかなか寝付くことが出来ず夜明けも間近になってしまいました。それならばいつそのこと、約束の場所へ早く行こうと旅館を出ましたが、夜はまだ明けておらず、傾いた月がまだ皎々と輝いていました。韋固がふと気が付くと、旅館の前の石の階段に、布袋に寄り掛かるように坐った老人が月光の下で本を読んでいる姿が目に入りました。

「何を読んでいるだろう」と思い、韋固がそっと老人に近づいて覗いてみますと、本に書かれた文字は、昔使われていた虫篆<sup>3)</sup>でもインドの梵字でもなく、オタマジャクシに似た全く見たことの無い文字で書かれていました。

不思議に思った韋固は老人に訊きました。

「お訊ねしますが、何の本を読んでいるのでしょうか？ 私は幼い頃から勉強を続け、世の中で使われている文字は、今では読めないものが殆どないと思っています。たとえば、西方の国の梵文でさえも読めますが、あなた様の読んでいらっしゃるご本の文字は見たことがありません。いったい何処の文字なのでしょう？」

すると老人は微笑んで答えました。

「この本はの、人の世のものではないのじゃ。だからお前さまが読めるはずはないのじゃ！」

韋固は吃驚して

「この世の本じゃない？ それではいったいどこの本なのですか？」

と訊き返しますと、老人は

「これは冥界の本じゃ」

と答えました。更に吃驚した韋固は

「冥界の本ですって？ するとあなたは冥界の方で、冥界からその本を持って来られたのですか？」

「そうじゃ、その通りじゃよ。」

韋固は質問を重ねました。

「あなた様が冥界の方といわれるのであれば、どうして今ここにいらっしゃるのです？」

「わしがここにるのが不思議なのではない。夜は冥界の世界だというのをご存じじゃろう。まだ夜も明けてないというのにお前さまがふらふら出歩こうとなさるからじゃよ。実はの、冥界の役人は、生きている人間の運命を管理しているのじゃ。だからと言っていつも冥界にいて仕事をしているわけではないのじゃ。時にはこの世も歩き回らなければならないときもある。お前さま達はご存じないかも知れませんが、この世で夜、道行く人の半分は冥界から来ているもの達なのじゃ」

と老人は説明しました。

韋固は老人の話に益々深い興味を覚え

「それではあなた様は冥界で何を管理していらっしゃるのですか？」

と訊ねました。

「私が管理しているのはの、人間の婚姻に関する帳簿なのじゃ」

韋固はそれを聞いて嬉しくなり自分のことを老人に話しました。

「実は、私は幼い頃に両親を亡くし淋しい日々を送りながら育ちました。その様な事情で、早く結婚し、子供を得て家の跡継ぎにしたいと願って来ましたが、この十年間、つてを頼んで妻となる人を求めて来ましたが、未だに見つからずにあります。今日は、元司馬だった藩氏の娘と見合いをする約束なので、待ちきれずこうして早朝宿を出たのです。どうでしょうか？ この縁談はうまく纏まるのでしょうか？」

すると老人は

「まだまだじゃ。運命というものは勝手に変えるわけにはゆかないのじゃよ。お前さまは将来、郡の役人になられるお方じゃ。何を隠そう、お前さまの妻となる女はまだ三歳になったばかりなのじゃ。が、十七歳になったらお前さんの家に入ることになっているのじゃ」

と言いました。韋固は

「そういうことですか。ところで、あなた様がお持ちの袋の中には何が入っているのですか？」

と訊ねました。すると、老人が答えました。

「紅い紐じゃよ。これで夫婦になる男女の足を結ぶのが私の仕事のひとつでもあるのじゃ。人が生まれると、すぐ結婚する相手とこっそり結んでおくのじゃ。敵同士の間柄に生まれても、貧富の差が大きくとも、例えば呉、楚二つ

の国のように離ればなれの異郷に生まれていたとしても、いったんこの紐で結びつけられると、もう相手を変えるわけにはゆかないのじゃ。お前さんの足は既に決まった相手と繋がれているのじゃ。他の人を求めてもそれは無用というようなものじゃよ」

韋固は老人の返事を聞いて焦って訊ねました。

「では、私の妻となる人は今どこにいるというのでしょうか？其の女はどんな家の娘さんなのでしょう？」

「お前さまが泊まっている旅館の北の方角の市場で野菜売りをしている陳ばあさんという人がいる。お前さまの結婚相手はその家の娘じゃ」

「こっそり覗いても良いでしょうか」

「陳ばあさんはの、よくあの子を抱いて市で野菜を売っている。わしについて来れば教えて上げよう」

夜はすっかり明けましたが、約束した相手方は来ませんでした。すると老人は開いていた本を閉じ、袋を担ぎ上げると市場に向かって歩き出しましたので韋固も其の後を付いて行きました。

市場に着いて老人が指し示す方をみますと、果たして片目がつぶれた、しかも粗末なぼろを纏った老婆が三歳ぐらいの女の子を抱いてやって来ました。とてもみすぼらしい格好をしているお婆さんでした。

老人は、その老婆を指して

「あの老婆が抱えている女の子こそお前さんの将来の妻じゃ」

と韋固に告げました。韋固がこれまで思い描いていた結婚相手とあまりに違っていましたので許しがたい気持ちになり、老人に訊ねました。

「私が若し、あの娘を殺したらどうなるのですか」

「あの娘は、天子から授かった俸禄で生きる運命の持ち主じゃよ。その娘とお前さまが結婚して生まれた息子のおかげで、娘は天子様から土地を貰うことになり、お前さま達は老後、幸せに過ごすことになるのじゃ。殺せるものではない」

老人は強く言い残すと、姿を消してしまいました。

韋固は怒りが収まらず老人を罵り始めました。

「老いぼれめ、きつとでたらめなことを言ったに違いない。私は士大夫<sup>4)</sup>の家柄に生まれついたのだ。結婚相手の家柄も私に釣り合う人でなければいけない。望みどおりの人が見つからないなら、美人の芸者でも身請けして妻としても良い。どうして片目がつぶれた汚い婆さんの娘を娶ることができようか！」

韋固は刀を研いで下人に渡しながら、

「お前はなんでも上手くやる。私の為に、あの女の子を殺して欲しい。成功した暁には望みどおりの金子をやろう」

と言い、下人は承知しました。

翌日、下人は刀を袖の中に隠し入れ、野菜市場に行きました。市場は人通りが絶えず賑やかでしたが、下人は人通りの隙を突いて女の子を刺すと、周りが騒然としている間

に素早く逃げ出し、韋固と共に遠くへ逃れて行きました。

韋固は下人に訊きました。

「ちゃんと刺せたか？」

「心臓を刺すつもりだったが、下手をして眉毛の真ん中に刺した」

と下人は答えました。その後、韋固は何回も求婚の機会を得ましたが、いずれも失敗に終わりました。

瞬く間に十四年の歳月が過ぎました。亡くなった父親の親友のお陰で韋固は相州(河南省)の軍の参軍(補佐)になり、相州の長官・王泰の下で、戸籍や、犯罪者の裁判に関わる仕事に携わりました。韋固の才能を見込んだ、王泰は自分の十七歳の娘を韋固に嫁がせました。其の娘は、なかなかの美人で、韋固は大変満足していました。

しかし、一つだけ不思議なところがありました。其の娘は、眉毛の真ん中にいつも花型に切り抜いた色紙を張り付けていて、入浴する際も取ったことはありませんでした。韋固は不思議に思いながらもそのまま一年経った或る日、宋城で出会った老人が言った事と、自分が下人に頼んで、野菜売りの老婆が抱いていた女の子の眉間を刺したことを思い出しました。

「君は、どうしていつも眉間に花を貼っているのかい？」

妻ははらはらと涙を流しながら答えました。

「実は私は州の長官どのの娘ではなく、姪なのです。私の父親は宋城の県令<sup>5)</sup>でした。私がまだ赤ちゃんだった頃、在任中の父が亡くなりました。その後、母も兄も亡くなり、私に残されたのは宋城にある屋敷だけでした。私を可哀相に思った乳母の陳氏が私と一緒に其の屋敷に住んで、野菜を売りながら暮らしていました。乳母は、幼い私をととても哀れんで、一刻も自分の手元から離さず育ててくれましたが、ある時、私を抱いて市場へ野菜を売りに行ったところ、突然、悪人が理由も告げず私の眉間を刀で刺しました。いまだ傷あとが消えませんが、それで色紙を花型に切り傷あとを隠しているのです。七、八年前、叔父が盧龍(河北省)に赴任した時、私を身元に置いてくれるようになりました。叔父はとても心の優しい人で、私を実の娘のように可愛がって育ててくれ、あなたに嫁がせてくれたのです」

ここまで聞いた韋固は妻に訊ねました、

「乳母の陳氏は、片目なのか？」

「そうです。何でご存知なのですか？」

「何という事なのだ！君を刺した人は実はわたしなのだ！運命とは、何と不思議なことなのだ」と言うと、妻に14年前のことを一つ一つ詳しく話しました。

自分たちが結ばれる運命だったことを知った二人は以後、一層愛し合って、睦まじい日々を送りました。愛の結晶ともいえる息子にも恵まれ、鯤と名付け育てました。そして、更に何年か過ぎ、成長した息子は、雁門地方の太守<sup>6)</sup>に任命されて、韋固の妻は太原郡太夫人<sup>7)</sup>に封じられ二人は老後も幸せに暮らしました。

その後、宋城の知事が其の話を聞き及び、「天命によって定められた人の運命は変えることが出来ないのだなあ」と深く感銘し、感無量に思い、韋固が月の下で老人と出会った旅館を「定婚店」に名付けたということです。(終)

● 注釈

1) 現在の商丘科或いは開封の両説ある。

- 2) 司馬：官名、長官を補佐する。
- 3) 虫篆：篆書の変体で、虫のようにくねくねと曲がって装飾化された先秦時代の文字の一種。
- 4) 士大夫：知識を持っている役人。
- 5) 県令：県の長官。
- 6) 太守：府の長官
- 7) 太夫人：長官の母親

アジアを読む (75) 浅田次郎著  
講談社文庫

## 地下鉄(メトロ)に乗って

地下鉄の駅の近くに30年間住んでいた。3年前にJR沿線に暮らし始めたが、最初の頃は、電車を待っている間の寒さや暑さに耐えられなかった。地下鉄が始まって終わるこの物語を読んで、階段を下りていって外の世界から遮断されるその安堵感を、思い出した。

浅田氏の小説は、現代の「おとぎばなし」だ。この小説でも、地下鉄が過去と繋がっていて、主人公は「過去」と「現在」を行ったり来たり。街と比べて、地下鉄の風景は、新しい線が引かれない限り、そんなに変わらない。だから、見慣れた風景から、そのまま時代が昭和に遡っても、精神的負担を比較的かけずにタイムスリップできそうな…気がする。

地下鉄と繋がっている過去は、主人公が反発している父親の若かりし時代だ。彼は、父親と時代を“共有”することで、戦中戦後の混沌とした時代を生き抜くために、父親が苦渋の選択を重ねて「今」があることを知

る。いろいろな選択肢のなかで、そのときに自分が「最善」と思えることを選び取ってきた「今」。それは、誰にも否定できないその人の人生だ。主人公が「僕らはただ、父のように生きるだけ」と、運命を受け入れていく一方で、巻き込まれてタイムスリップする彼の恋人は、自らの力で運命を変えてしまう。

日常の選択の積み重ねが「今」を作り、人生を決めていくのだと思うと少し怖い。昨日、テレビで観た31歳の遅咲きミュージシャンは、引きこもりだった自分を振り切って、旅に出る。世界28カ国、515日間の旅を終えて、彼は、今まで一人だけがんばっていたと思っていたけど、本当はたくさんの人に支えられていたことに気が付いたという。人生のターニングポイントは、結局、自分の一歩だったりする。どうにもならない世の中で、せめて自分の選択だけは、前を向いていたい。(真中智子)



松本杏花さんの俳句

千里同風qiān lǐ tóng fēngより

爺婆のおちょぼ口してサクランボ

wēng yù xīn yí rán  
翁 姫 心 怡 然

shuāngchún jǐn mǐn suō chéngtuán  
双 唇 紧 抿 缩 成 团

yīngtáo kǒuzhōng hán  
樱 桃 口 中 含

季语 樱桃，夏。

赏析 此首俳句是作者观看相扑比赛时的所作。应该说，作者偏离了主题，但有时感动人的并非一定是主题。作者看到老汉老太吃樱桃的口型，不觉莞尔，有感而发，挥毫即就。松本女士观察事物细致入微，描写惟妙惟肖，令人钦佩。

山法師風折り返す森の奥

shān lìzhī wēi àn  
山 荔 枝 伟 岸

yèfēng xí lái jìng zhé fǎn  
夜 风 袭 来 竟 折 返

chù lì cóng lín jiān  
矗 立 丛 林 间

季语 山荔枝，又称狭叶四照花夏。西山茱萸科落叶小乔木，高约六米。初夏开花，长于山野。

赏析 森林深处孕育了山荔枝，而高大的山荔枝又阻止狂风的侵袭，这种反哺现象，造就了生物链的巡回。此句富有哲理，耐人咀嚼。

「こんなの民間芸術じゃない？」

私の調査地である、中国の陝北（陝西省北部）は今も豊かな民間芸術が残る地域ですが、その文化をどのように保存、発展させていくべきかは、一見するとみながお国の号令に準じているようでいて、その実、各県ごとの取り組み方は異なっています。

たとえば、地方都市である延安にほど近い安塞県は、剪纸や「腰鼓」と呼ばれる踊りが「国家級」の非物質文化遺産（無形文化財）の認定を受ける、いわば陝北の民間芸術の優等生ですが、ここは地方政府の文化部門が観光政策とも絡めつつ、熱心に「伝統的な」図案や技法の保護と継承の舵取りをしています。安塞では早くも70年代から研究者等の専門家を多く招き、農村家庭に保管されていた古い剪纸の実物型紙を収集し、整理・体系づける作業が行われており、次世代の剪り手の養成にはまずそれらの古い剪纸の模倣を通して技法や伝統的な吉祥図案の習得をさせます。中国の「非物質文化遺産」は、古くから「伝統」を守り続けてきたという「系統」の証を大きな判断基準とするため、安塞の方策はこの点で非常に有利に働いていると言えます。

それに比べて私が拠点にしている延川県は、地方政府は文化政策に力を入れておらず、かつて80年代に集めた（笞だという）古い剪纸図案等も今ではすべて行方知れず。その一方で、安塞よりも個人名が世に出ている剪纸作家が多いというのも事実です。延川の剪纸作家が「作品」として制作する剪纸は、自分の夢や記憶、或いは神々の姿など、農村の窑洞の装飾品としての元来の剪纸にはないモチーフが多く登場し、画風も作家それぞれ違うことが目指されます。TVなどで中継される「民間芸術祭」といった類のイベントの舞台に立ち、大勢の観客を前に、下画を描かず即興で白紙から大型作品を切り出せる、いわばパフォーマンスが出来る作家の登場も、延川の「作家」化を目立たせている要因の一つかもしれません。このような状況を見た都市の専門家や芸術家のなかには、延川の剪纸をニセモノ、指導者を「古き良き伝統的な民間剪纸の破壊者」と批判し、ひいてはそこで調査する私に「君はだまされている」と忠告や同情する人もいます。

このような安塞と延川の違いは、端的に言えば前者は「伝統工芸」として、後者は個人の「芸術」として発展が目

指されたことにあり、そこに優劣はないと、私自身は考えています。そして、この方向性の違いの最大の要因は、双方の指導者の「民間」や「芸術」についての考え方や立場の違いにあること自体に、興味をもっています。

陝北地域において、「民間芸術」の保護・育成が文化館と呼ばれる農民教育機関の最大責務となったのは、文革後の70年代末に遡ります。各県の文化館の幹部たちが競争するように農村調査を行い、優れた剪纸図案の収集に奔走したり、剪纸の名手を集めて学習班を開いたこの時代に、各県の民間芸術は方向づけられていきました。安塞を含めた他県が、専門的な芸術教育を受けた人材を指導者として置いたのに対して、延川県の文化館で指揮をとったのは、馮山雲という僻村の貧しい農家出身の男性でした。



写真1 馮山雲さん

1949年生れの馮さんは出身村の小学校教師を経て、集団農業時代に生産隊の副隊長（今で言う副村長）として農業労働をしていましたが、趣味の版画が延安の展覧会で高評価を得たのをきっかけに文化館の美術幹部に抜擢され、その後は自身もまた版画家や布絵作家として名を成していきました。

当時、農民たちが自分たちには「文化」がない（この場合の文化は、識字や学歴を指します）と考えていた状況下であって、馮さんは身の回りにありふれる自分たちの農村生活の中にこそ「民間文化」があるとして、その中の精神や智慧のすばらしさを農民達自身が認め、それぞれの生きる力に変えていくにはどうすればいいかと考えました。中でも剪纸は、馮さんによって「声なき農村女性の自己表現の手段」として最も重視されることとなります。

今号から数回に分けて、この「農民画家」を主役にお話しします。彼と延川の民間芸術について考えることは、私たちが自分の身の回りの生活や文化を「新たな」眼で眺め、明日の糧を見いだすヒントをくれるかもしれません。画家としての彼の軌跡をお話する前に、まずは馮山雲自身が書いた文章を直接ご紹介することにします。

「小程村から出発して」と題されたこの文章は、彼が靳之林という北京・中央美術学院教授の油絵画家とともに企図し、2001年に出来上がった「小程民間芸術村」の設立や運営をめぐる思い出、さらにそこから派生して自分たちが住まう黄土高原やその文化について綴ったものです。

「小程民間芸術村」は、延川県の南側、地元では最僻地とされる地区にある「小程村」という小さな山村を民間芸術

の保護・発信地にしようと企画され、隣接する碾畔村に空き窑洞(写真2)をそのまま生かした陝北の生活文化博物館を作るプロジェクトと同時進行で進められました。両村は、「乾坤湾」という黄河がSの字形に大きくうねる雄大な景観を望む場所に位置します。(この場所を訪れた有為楠君代さんの157号の「黄土高原やぶにらみの旅①」をご覧ください!)

では前置きはこれくらいにして、馮さん自身の文章をかいつまんで見ていきましょう。

## 黄河湾の啓示

黄河の源はどこにある？

羊飼いの男の酒壺に、

フェルトを作る女の歌声に、

黄ばんだ史書のページの上に、

融け始めた雪の中に

私たちはどこからきて、どこに向かうのか。これは私たち民族の一人一人の関心事だ。黄河が幾千万年にわたって生み出した文明史は、民族精神に深く沈澱する源である。今日、黄土高原に黄河が作る大渓谷、その大きなうねりのただ中に位置する小程村を訪れた人々は、幾世代もの黄河文化によって深く刻まれた記憶を呼び起され、胸を高鳴らせる。97年初冬に初めてこの村を訪れた靳之林先生もまた、この土地に強く惹きつけられた一人だ。彼はこの地の民間文化の中にわが民族を探すべく、小程民間芸術村や碾畔原生態博物館の設立に着手した。

一匹の龍のごとく身をよじらせ黄土高原から大海へと駆け抜ける黄河。なかでも黄河が勢いよく巨

大な弧を描く乾坤湾はまさに壮観だ。にもかかわらずここが最近まで知られることがなかったのは、ひとえに深い山谷に囲まれた痩せた土地であり、交通が不便で訪れる人などいなかったからである。「渴いた河辺は石ばかり、星月明かりで牛が渴わき死ぬ」という村の人たちの言い草からは、かつてこの地がどれほど貧困であったかがよくわかる。旱魃以外に洪水もまたひどく、雨が止まぬと泥水となった河水が氾濫し、あっという間に村を呑み込んだ。しかし、勇ましく堅強な黄河の申し子たちは、一つ、また一つと災難に打ち勝ち、幾世代にもわたってこの地で生き抜いて子孫を繁栄させてきたのだ。彼らはいふ。「旱魃によ

て鋼は打たれ、洪水が流れ去った後には精神が沈殿する」。

『天書』を読んだことがあるだろうか？ 清水湾の岸壁の上には一冊の天書が刻まれている。言い伝えによればこの天書のまわりには八チの巢が見張りする洞窟があり、中には無数の宝があるという。天書を解読した者はその宝庫の鍵を見つけられると言われるが、これまで多くの人々がこの書を読もうとしたものの、わかる者はい

なかったようだ。

この地にはこんな話も伝わる。ある若い坊主が老和尚に向かって、何年も仏経を学んでいるのに、道理がわからないと教えを請うた。老和尚は、自分は字が読めないからお前が経を読んで聞かせてくれれば、その中の道理を話してやろう、と答えた。若い坊主は、文字も読めずにどうやってその道理を知ることができるのかと尋ねる。老和尚いわく、「道理と文字とは別物だ。道理を天に輝く月に例えるなら、文字はお前や私の手指に同じ。指で月を指すことはできても、指は畢竟、月ではない。月は指で指さずとも見えるのだから」。

天書もまた手指に似て、指すことはできても届かない。その中の道理がわかって初めて、この土地から宝をとりだすことができるのだろう。靳先生もまた天書を読んだが、彼はむしろ暑さ寒さの年月を通じて、果てしない黄色い大地と向かい合い、大地のただ中からこの地の宝の鍵を探し出した。そう、小程村への路を。

97年に靳之林先生は乾坤湾で初めて油絵を描いた後、付近一帯

の多くの村々、山々をめぐり、くまなく調べあげた。役人が「一つ一つの山丘にどんな意味があるというのです？」といぶかしがると、靳先生は「山の中に入り込むと、山は見えず。君たちは君たちの土地をまだ知らない」と軽やかに答えた。「エジプトのピラミッドにもアメリカのグランドキャニオンにも行ったが、ここの素晴らしさにはかなわない」。それ以来、彼はこの地を第二の故郷として、毎年訪れるようになった。2001年だけでも半年あまり滞在し、油絵を描くとともに、古い村々や墳墓の調査を重ね、民間芸術や土地の習俗を記録した。こうしてその年の年末、県政府の協力を得て、小程民間芸術村の創立に至ったのだ。

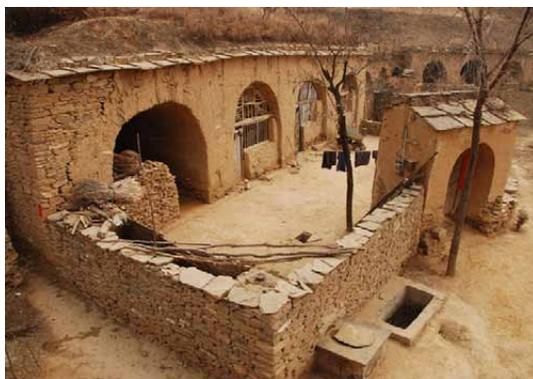


写真2 古い村をそのまま利用した碾畔博物館



写真3 碾畔博物館の中



写真4 乾坤湾

## ある少女の秘密の裏に

昔から、民歌(民謡)は男が喉を鳴らして歌うもの、剪紙は女の心を映し出すものだと思っていた。この地で「男は憂えて歌うたい、女は憂えて涙ぐむ」と言われるのは、男は苦しみや悲しみを抱えた時に歌うことでその苦悶を表すが、日がな一日家にいる女達はその苦悶を剪紙に表すほかないからだ。こんな秧歌を聞くと、彼女たちの心のあらわし方がよくわかる。

初三も十三も二十三(日)も／姉妹は牡丹を刺繍する／長女が刺すのは石榴花、二女が刺すのは牡丹花／残った三女は刺繍が下手で、足ふみ車で糸紡ぐ

小程村には幾人かの、靴の中敷きの刺繍に長けた少女がいたが、はずかしがりやの彼女たちは、「秘密」を他のひとには知られるわけにはいかなかった。そんな彼女たちに、中敷きを斬先生に見せるよう勧めたのは隣家のおばさんだった。一人の少女が作った中敷きを見た斬先生は、このご時世に少女がこれほど古い図案を刺繍できることに、驚いたという。

それを聞いて私は、「刺繍は女たちの仕事ですからね。本もテレビもなければ、何かやるのが欲しくもなりますよ」と何の気なしに言った。「だが、こんなに古い図案を若者が作れるのはめずらしいと思わないか?」と斬老師。私は意固地になって「こんな辺鄙で遅れた村、文化がないですからね」と答えると、とうとう斬老師の雷が落ちた。「文化とは何か、ここいらの文化が内包するものを前が分かっているとでもいうのか?今すぐお年寄りに聞いてまわるといい。この図案にどんな意味があり、何のために使われるのか。」

その後数日にわたり、何人もの家を訪ね歩く中で、一人の老女がこんな秧歌を聞かせてくれた。

その後数日にわたり、何人もの家を訪ね歩く中で、一人の老女がこんな秧歌を聞かせてくれた。

十七八の娘が門前で／雄鶏と雌鶏の追いかけてこ  
を見ている／呼ばれた父親が娘を見ると／娘の眼に溢れる涙

「女の子が大きくなったら婿探ししてやらないとねえ。」と老女。私はおどけて

「口バは瘦せると筋が増え、女は歳とりゃ心配事が増える。あんたにどうして人様が娘婿を探してるのがわかるんだい?」

と私は尋ねた。

「靴の中敷きに何が刺繍してあると思ってるんだい? “魚戯蓮花”(の図案)とは夫婦がいい縁を結ぶやり方だ。あんた、そんなことも知らないでよく幹部が務まるねえ」老婆はそう言って大笑いした。

この数日間で私は少なからぬ知識を得た。民間芸術の

中の刺繍、剪紙、麵花(花饅頭)、布のおもちゃ、棗細工や草編み細工、民歌、故事、童謡……ここにまだこんなにもたくさんの民間芸術があるとは思ってもよらなかった。

ある老人にこう言われた。

「あんたたち街の人は電気を煌々と灯して夜にもテレビが見れるけど、わしら村のもんは電気もなくテレビも見れないし、何かしらしたくもなるってもんだ。」

もし、この村に電気が通ったら、人びとの気持はテレビに向かい、こんな手仕事をする心持ちも失われていくのだろうか。そう思ったら、だんだん彼女らの手仕事に興味が湧いてきて、“秘密”の影に一体何が隠れているのか知りたくてたまらなくなった。これらの魚や蓮、石榴が本当には何なのか質問しようと婆さん達を訪ねてまわったが、どんなに訊いても笑うばかりで答えてくれない。しかたなく爺さんたちに交じってだべっているときに、彼らがしてくれたある笑い話に、私は秘密の一端を垣間見た気がした。

昔々あるところに、村の子どもたちを教えるひとりの先生がいた。ある日、貧家の男の子がご飯をご馳走するからと言って先生を家に連れて帰った。子どもの母親は仕事を片付けてから食事を出すといい、オンドルの上であぐらをかいて糸巻きを続けた。母親がズボンに穴が

あいているのを恥じるのを見て、息子は機転をきかせてこう言った。「一輪の蓮の花が今にもズボンに咲きそうだ」。先生はこの子の賢さを誉めた。この話を聞いた金持ち夫婦がわが子の賢さを知らしめようと、破れてもいないズボンに鉄で穴をあけ、同じく先生を食事に招いた。父親はわが子が例の話をするのを待ったが、いっこうに話し始めない息子にしびれをきらして平手打ちにした。見かねた母親が「ほら、蓮の花、蓮の花(蓮花)!」と声をかけると、うるたえた息子は慌てて表に出て、鎌の柄(鎌把)をもってきて父親に渡した。

私は民間芸術の中の「蓮花」の意味を思って笑ってしまった。つまりは、「魚戯蓮」は男女の愛の囁き、「魚鑽蓮」は男女の結び合いを、「石榴囊牡丹」は賢男と美女のよき結婚を…というように、たくさんの隠れた意味があるということだ。こういうなんとも歯切れの悪い秘密こそ、民間芸術の真の意味合いに違いない。

(次号は、「蠟燭の灯りの下での剪紙学習班」につづく)

◆丹羽朋子(にわともこ)——

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍中。中国陝北の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして活動中。一芯社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中。



写真5 小程村の名物おじさん

前号で、有為楠さん以外はイニシャルを使ったが、先日彼女から渡辺さんをWさんとするのはおかしいとクレームがついた。写真提供・渡辺栄子と既に名前がでているのだからと…。納得である。

3泊4日の西安滞在中に、バスと徒歩で私たちが訪れた観光スポットは、2日目の大雁塔と陝西博物館、3日目の小雁塔と碑林博物館(私は体調を崩してホテルの部屋で休んでいたが…)、4日目の半坡博物館だ。ほとんどのところがシルバー割引で入場できた。60歳からだったり70歳からだったりするが、使えるところではすかさずパスポートをだして割引料金で入れてもらった。

これらの名所はたいていのガイドブックに載っているし、私たちの感想もだいたい同じだから省略することにして、今回は、4日間の西安まち歩きの中で受けた親切や、感じたことなどを書いて、西安を終わりにして有為楠さんに戻そうと思う。

\*\*\*\*\*

私たちが3泊した西安賓館は西安事件で張学良と蒋介石の会見場所となった老舗だそう。(それは後日知ったのだが…)。そのホテルのすぐ前の‘草場坡’というバス停から毎日バスに乗った。バス代は市内は1元、乗車時に箱に入れる。私たち3人は年齢的にはそれほど差はないのだが、私が一番老けて見えたのか、疲れているように見えたのか、車内ではいつも一番に席を譲られた。席を譲ってくれるのは若い男性が多かったのととても嬉しかった。車掌さんが席を譲るように若者に言うときもあつたし、おばあさんが隣に座っていた孫を自分の膝に抱いて、席を勧めてくれたこともあつた。だから、バスの車内はいつも混んでいたが、座れなかったことはほとんどなかった。

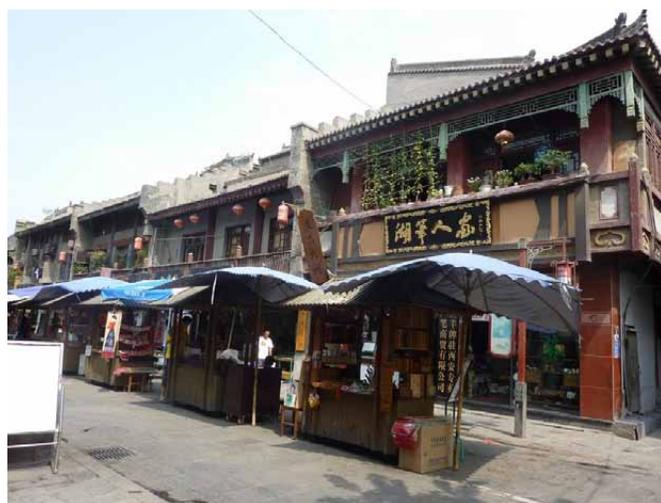
南門の近くで、中年の女性に半坡博物館へ行くバス停を尋ねた。バス停まで連れていってくれて、方向が同じと一緒にバスに乗って見ず知らずの私たちのバス代まで自分のバスカードで払ってくれた。彼女の娘さんが千葉に住んでいるとのことだった。

ホテルから南門へ行く途中の雑貨屋さんで、月餅の木型を売っている店がないかと尋ねた。私たちの地図を一緒に見てくれて、どこから何番のバスに乗ってどこで降りるか丁寧に繰り返しおしえてくれた。‘民楽園’というバス停で降りた私たちは、前から歩いてきた年配の夫

婦にまた月餅木型の店を尋ねた。成都から来ているということだったが、彼らもとても丁寧に何回も繰り返しておしえてくれた。私たちは2ブロックくらい歩いたところで、この角を右に曲がるのかしら? なんて迷っていると、後ろから先程の夫婦の夫のほうが大汗をかきながら走ってきて、その信号を右に曲がってとおしえてくれた。私たちがちゃんと指示通りに行けるかどうかずっと見ていてくれたのだ。おかげで私たちは1軒だけある月餅木型を売っている店にたどりつくことができた。帰国後、有為楠さんは、その月餅木型と延安で買った棗ナツメを使って、中秋節に合わせて料理講座で月餅作りを指導した。

碑林博物館近くの路上で店をだしている印鑑彫りのおにいさん、有為楠さんと私で何本か注文した。暗くなる夕方7時に店じまいするという。かなり時間がかかりそうなので、先に郵便局や本屋さんに行って用事を済ませることにした。7時少し前に店に戻ると、おにいさんは私たちの注文の最後の1本を彫っていた。夕闇が迫っている。陽刻で頼んだものが陰刻になっていたものがあつた。彼は嫌な顔ひとつせず彫りなおしてくれた。できあがったときには手元がほとんど見えないほど暗くなっていた。その上値引きもしてくれた。

4日間でタクシーに乗ったのは1日目の西安長距離バスターミナルから西安賓館、4日目の西安賓館から西安駅の2回だけだった。大きなトランクやリュックを持つての移動がたいへんだったからだ。それ以外はすべて路線バスと徒歩だった。だが西安のタクシー料金は日本よりずっと安いし、時間も短縮できるから無理してバスに乗らないで、タクシーを使ったほうが良いかもしれない。



印鑑彫りの露店などが並ぶ碑林付近の様子(渡辺栄子撮影)

こんなことがあった。夕方薄暗くなって、鐘楼からホテル方面に向かうバス停を捜した。鐘楼付近はバス停がいくつもあって、ひとつのバス停にいくつもの系統のバスがくる。行き先案内板をひとつずつ見ていって、やっと‘草場坡’を通るバス停を見つけた。

夕方のラッシュ時で人・人・人で鐘楼付近は大混雑だ。バスはひっきりなしに来るが、バス停には3台くらいしかとまれない。4台目のバスは前にとまっているバスが出るのを待たずに、1台目のバスの横の車道側にとまって乗客を降ろす。そのバスに乗ろうとしていた人は歩道側に停車しているバスの間を走り抜けて目的のバスに乗り込む。私たちはうろろろしているうちに乗り遅れた。車道に飛び出して目的のバスまでダッシュするのは命がけ(?)だ。そこまではするならタクシーのほうが良いかもしれない。

西安の鐘楼付近にスターバックス(星巴克)があった。月餅木型を求めて歩き回り疲れた私たちはそこで一休みすることにした。普通のコーヒーを頼んだのだが、3人分で何と90元! 1桁間違っただのではないかと疑った。日本円に換算してみれば納得なのだが、金銭感覚はすっかり日本円から中国元の世界になっている。何しろ、旅行社の王さんに紹介してもらった咪咪餃子店での前日の夕食は2種類の餃子と2品の料理を注文して3人で22元だったのだ。非常に高価なコーヒーを飲み一息ついて周囲をみると皆裕福そうな客ばかりで、みすぼらしい服装の客は私たちだけだった。

星巴克で思い出したが、10年くらい前、北京の故宮の中に星巴克がオープンしたときに、世界遺産の故宮になぜということで反対運動があり撤退したニュースが話題になったことがあった。世界各都市の星巴克店にはその都市のオリジナルマグカップがあるそうで、有為楠さんはそれを集めている人へのおみやげにと西安星巴克のマグカップを買い求めていた。私たちが一休みした星巴克の隣にハーゲンダッツ(哈根达斯)があったが、そのアイスクリームは日本円で1,000円くらいするとか…。バスの車窓からマクドナルド(麦当劳)やケンタッキー(肯德基)の看板も見えたが、そのハンバーガーやフライドチキンの値段はどうなのだろうか。日本でもほとんど利用したことがないので比べようがない。

今回の旅は、言葉是北京で何年か生活していた有為楠さん、体調管理は看護師の渡辺さん、このふたりと一緒にだから、周路さんと別れてからも何不自由なく安心して西安と北京の旅を楽しむことができた。道を尋ねたり、レストランで料理を注文したり、店で買い物をしたりす



直方体のパトカー

るときは、有為楠さんの中国語にお任せである。

“いくらですか”は“多少錢?”私の知っている数少ない中国語である。ところが有為楠さんはそう言ってないようだ。聴力が特に苦手な私は、彼女に何と言ってるのか尋ねると、彼女は、巻舌音の‘少’の発音が嫌だから買い物では“怎么卖?”を使っているという。そんな言い方もあることを初めて知った。さすが中国での生活が長い有為楠さん! それから彼女が中国語で話すときはなるべく傍にくっついて注意してきくようにした。

本屋さんで中国語講座の教科書を探しているときに、彼女は店員さんに“外国人学習漢語的課本在哪儿卖?”と尋ねた。そのときは不思議なことに店員さんの答えも聞き取れた。2週間の旅の終わりの頃でなくもっと早く気づいて有為楠さんにくっついていれば私の聴力も少しは上達したかも…。

看護師の渡辺さんは、私が自分の体力の限界も忘れて突っ走ろうとすると、さりげなくブレーキをかけてくれる。バスで次の目的地まで行ってしまおうとすると、「猛暑の中、かなり歩きまわっているから、低血糖になっちゃうし、この辺りで食事にしたほうがいい。」ときっぱり言う。

彼女は、また、名カメラマンでもある。旅行中もたくさん写真を撮った。私は3日目頃からカメラを持ち歩かず全部彼女にお任せしてしまった。“あれ、おもしろい形してるわね”と大雁塔の近くでシャッターを押したのが上の直方体のパトカーだ(上の写真)。

西安から北京へ向かう夜行列車はそれほど遅れることなく西安を発車した。私たちは上・下段2段ベッドのコンパートメント(軟臥)。あとひとりどんな人が乗ってくるのかと気になっていた。おば(あ)さん3人の中に入ってきたのは若い男性だった。上段ベッドの彼はきつくとつろげず落ちつかなかっただろう。私も通路をはさんだ上段のベッドで、別の意味で落ちつかなかく、でも幸せな気分ですぐ眠りについた。

6月号では、ウルムチ市を紹介したい。聞いた感じでは中国の都市のように思えないが、漢字では、「烏魯木齊」と書く。別にカラスが多い所ではなく単なる音の当て字であろう。

カラスと言えば、奥地はいざ知らずどこに旅してもカラスやスズメはもとより鳥はあまり見かけない。東北3省では黒と白のツートンカラーのカササギをたまに見かける。あの七夕の夜、牽牛と織女の再会をとりもつ鳥である。尾がピンと長くスタイルはとても素晴らしい。声はカラス科の鳥であるためかあまりよくないが、なぜか中国ではその声を聞くと「喜びの前兆」と言われているらしい。ゴルフ場でたまに見かけるが、ホールインワンでもお願いしたい。ちなみに漢字では「喜鵲(シーチュエ)」と書くが、やはり「喜」の字があてはめてある。

さて話を戻すと、上海の紅橋空港から飛行機に乗るとウルムチまで約5時間かかる。西方に約4000km飛ぶのだからこのくらいかかるわけである。あと少しでウルムチかなと思いつつ窓から外を見ると眼下に真っ白く輝く山脈が見えている。友人に聞くとこれが「天山山脈」だと言う。なるほど平山郁夫画伯のあの絵画の通りである。とても迫力があり神聖な山に思われた。

ウルムチ市は、シルクロード要衝の都市として有名であるが、新疆ウイグル自治区の省都で人口は約185万人である。省・自治区としては中国最大の面積を持つ。同自治区の政治・経済・文化の中心地であり、民族はウイグル族・漢民族・カザフ族・モンゴル族など42の民族が入り交る。町を歩くと頭に白いウイグル帽をのせた人が目につき、また尖塔のある建物も散見され、中国の他の都市と異なりイスラム文化の香があちこちにただよっている。

しかし全体的には高層ビルが立ち並び、どこにでも  
ある近代都市に変貌している。次第に漢民族文化にの

み込まれていっているように感じた。私が訪れたのは、2008年の4月末頃だったがその3ヶ月余り後、北京オリンピックが開催された。この時ウイグル族やチベット族の暴動が発生し、これに対して中国政府が武力で鎮圧したのは記憶に新しいと思う。政府の方針で漢民族をこれらの地方への移住を奨励しているのだから民族間の争いが絶えないのはあたり前であろう。

自治区といっても政治経済の主要ポストは漢民族が握っているのだから「自治区」とは名ばかりである。



国際大バザールというショッピング街

今の胡錦濤国家主席はチベット自治区の責任者だった時、チベット族への高圧的な行政を行い、その統治を評価され主席までのぼりつめたと言われている。13億の民をコントロールするには一党独裁による統治もいたし方ないのかも知れないが、発言の自由が制約される

国はやはり民主国家とはいえない。しかし一個人として見れば、どこの国でもバランスのとれた考え方をする人、素晴らしい人材も多く、国と個人を同一に見るべきではない。

さてこの地方は、年間降水量は平均200ミリ程度である。2010年の日本の夏は各地に集中豪雨があり、1時間に50ミリも降った都市も多かったが、その様な地方の1日分の雨量が年間雨量に等しくなるくらい雨の少ないところなのである。それもそのはず、このウルムチ市から東西南北どこに車で向かってても砂漠にぶつかるのである。

新疆の「疆」の字について現地ガイドは次のように説明してくれた。一は山脈を表わし、田は盆地のことだと言う。隣の一番上の一は阿爾泰(アルタイ)山脈、次の田は准噶爾(ジュンガル)盆地、次の一は天山山脈、次の田は塔里木(タリム)盆地、そして一番下の一は崑崙(クンルン)山脈を指すというのである。盆地といっても殆どは砂漠である。

この疆の字はこのようにして作られた漢字と言う

ことだが、学者に確認してはいないが、私は納得した。(漢和辞典で見るとこの字の意味は「土地の境界」とあるが以上のような説明はされていない。)関心のある方は一度世界地図をごらんになりこの地方の地形と疆の字をあわせてみていただきたい。

ウルムチの市内に入ってまず「新疆ウイグル自治区博物館」を見学した。ウイグル各地の民族の紹介と古代の出土品の2部門に分かれているが、ここで日本でも東京の博物館で展示されたことがある有名な「楼蘭の美女」のミイラを見た。この地方は乾燥しているので各地でミイラが出てくるようだ。美女といっても生前の美しさは想像すら出来ないが、できることなら生前の姿を見てみたいものである。またこの地方は品質のいい玉がとれることでも有名で中でも和田(ホータンと読むそうだ)の白玉はすばらしい。いいものはダイヤモンドと同じくらい高価なものもある。博物館内に売店がありそこで玉でつくったアクセサリーをいろいろ売っていた。

ここを後にして次に国際大バザールというショッピング街を散策。ウイグル族の衣料品や食品が豊富に置かれている。このバザールを見ていると中国というより、行ったことは無いが、イランやイラクあたりにいるような錯覚を起すほどだ。しかし建物の中に入ると治安上も問題が出てくるとガイドが言うので程ほどにして切りあげた。

ホテルにつきゆっくりと食事をとり、夜8時ころレストランを出たが、外をよく見るとまだ明るいのに驚いた。この地方は9時を過ぎないと暗くなっていけないのである。前述したように上海からさらに4000km西にあるのだから日が暮れるのが遅いのはあたりまえだ。にも拘らずあの広大な中国で、国として正式に決められている時刻は北京時間1つしかないのである。しかしやはり生活しにくいためかどうか知らないが、ウルムチは独自の時間を設定し北京に対し<sup>マイナス</sup>2時間の時差を設けている。旅行される時は北京時間なのかウルムチ時間なのか念のため確認した方がよい。

翌日、ウルムチ市の北東約100kmのところにある「天池」に向かった。朝8時にバスが出発したが途中から道路は舗装されておらず、凸凹道が続く。バスは常に左右に揺れ、時折とびあがるほど揺れたりした。3



天池の前で記念撮影

時間半も揺られ続けて、ようやくバスから降りた時はホッとした。そこから坂道をどのくらい歩いたであろうか、急に眼前に別世界が広がった。それは「神の池」とも「天の鏡」とも呼ばれる青く澄んだ神秘的湖である。なるほど天の池と命名するはずだと思った。

湖のずっと向こうに標高5445mのボゴタ峰という高山の頂がそびえているが、この天池はその中腹1980mのところを抱かれているのだという。ここには伝説があり、西王母という神様が鏡に使った湖だったという。湖面は約5km<sup>2</sup>で最も深いところで105mある。私が訪れた時は4月末というのに湖の周辺は雪と氷がかなり残っていて、見るからに冷たそうであった。湖畔には遊牧民族の家であるパオに似た家がたくさんあり、我々はその一軒を訪問した。お菓子やミルクティ(羊乳)やシシカバブをごちそうになり、通訳を通して家の人とお話することができたが、とても皆さん親切で親近感を持った。

中国という国の広さは日本の26倍もあり、各地方それぞれの文化、習慣、風景がある。ウルムチやそのあと訪問した吐魯番(トルファン)や敦煌のような場所は日本にはもちろんないが、中国国内でも独得の素晴らしさがある地域である。独自の文化や言語等を持つ地域を漢民族文化で混ぜ合わせないで欲しいと思いつつ旅を続けた。

#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

私が福州にいたのは2009年9月から翌年7月までの約1年間(正味11カ月)に過ぎません。しかし、この1年間は、日本での生活の数年分に相当するような気がします。というのは、現地での人との付き合いに大変恵まれ、この1年間でとても充実していたことがあります。新しい土地になじめるかどうかは食べ物や土地の習慣も重要な要素ですが、それらより人と人との関わり合いがどのようだったかという点にかかっていると思います。その意味で私の福州滞在は充実していたと言ってもよいでしょう。

私が福州で知り合った人々は中国人だけではなく、日本人もいれば、アメリカ人、台湾人、モーリシャス人といった国籍の人々もいました。私がいた大学では、実は日本人教師は私だけで、当初1ヶ月間ほどはまともな日本語を使う機会がなく、日本語に飢えていた状態でした。しかし、日本語が使用されていないぶん英語を使うことが多く、中国でこんなに英語が通用するとは思ってもいませんでした。勤めていた大学構内では、私が日本から来た教師だと分かると、英語で話しかけてくる先生や学生が何人もいました。彼らとはすぐ仲良くなり、あちこち案内していただく機会等が多々ありました。

私の住んでいた教員寮の隣の部屋には、交換教授として来ていた郭林平先生という台湾人の先生がいて、美術を教えていましたが、少し日本語が分かり、時々日本語の歌を歌ったりしていました。特別日本語を勉強したわけではなく、戦前に日本語教育を受けた父親から日本語を習ったそうです。彼が歌う歌は戦前の古い歌(軍歌や童謡)ばかりで、私が知らないものでした。父親譲りの日本語はいかにも古風で、今の人々には理解できないような言葉もあります。しかし、彼とは度々、一緒に食事をしたり、散歩したり、また中国人学生を交えて何時間も話し合うこともあり、彼は今でも忘れられない老朋友の一人になりました。

英語を教える教師は4人いましたが、その中にChris(クリス)という名前のモーリシャス出身の男性がいました。最初マレーシアと言っているように聞こえたので、「ああ、そうか」とひとりで納得していましたが、そうではなく、アフリカのモーリシャスでした。彼の両親はモーリシャスへ移住した福建省出身の華僑で、彼自身は福建語は話せても北京語は出来ません。年齢は30歳で、独身です。

私が福州で日本語を教え始めた頃は、よく一緒に食堂で食事をしたりしましたが、ある時期を境にしてぱったりと彼からの誘いが来なくなりました。しばらくして、女子学生の一人と仲良く話している様子が度々見受けられ、寮でも二人一緒にの姿が見られるようになりました。2人は恋人になったのだとわかりました。



写真①



写真②

前期が終わるころに、二人一緒に私を訪ねてきて、「私たちは婚約しました」と報告しながら、中国の習慣により沢山の餽をくれました。彼の婚約相手は彼の教え子で、大学3年生の学生です。何年か前までは先生と学生が恋愛に陥るなどということはありませんでしたが、今ではもう何ら問題はなくなったのです。写真①は、婚約した2人の写真です。彼女が卒業したら結婚すると言っていましたから、今年中にも結婚するかもしれません。

数多くの中国人とも知り合いました。中でも、私の教え子の親類である張志雲氏は福州の中学校で教えている英語教師(写真②)で、親しくお付き合いした中国人の一人です。10月1日からの国

慶節の休暇で教え子の故郷の南靖に行った時に出会いました。彼は車を所有していたので、当地で世界遺産に登録されている土樓を何箇所か案内してくれました。中国人からなかなか本音を聞き出すことは難しいですが、英語が共通語ということもあり、普通では聞くことのできない話を話してくれたりしました。福州に戻ってから何度かお会いしたことは言うまでもありません。

その他、私が身元保証人になって日本にいたことのある中国の方々にも福州や廈門(アモイ)でお会いして旧交を深めたり、又、福州で初めてお会いしお付き合いして、忘れがたい印象を私に刻み込んだ、現地在住の日本の方々もいます。福州には約数百人の日本人がおり、日本人会や日本企業会があります。毎月定期的に会合を持ち、たくさんの方々とお会いできました。その中でSさんとKさんには大変お世話になりました。

Sさんは留学生を斡先する会社を持ち、多くの若い中国人を日本に留学させています。福州のことや中国に関する知識が豊富で、何かと教えてもらいましたし、Kさんは私と同様に日本語を教えていて、中国在住歴が長い方です。彼

と奥さんとは初め教会で会いました。

ある日学生から誘われて教会に行き、お二人に初めてお会いしたのですが、お二人は敬虔なクリスチャンで、毎日曜日礼拝に出席し、その上奥さんは教会の婦人会に参加され、日曜学校の先生方のお手伝いをされているのだそうです。写真③をご覧ください。これは礼拝後に婦人会の方々と昼食をとった時の写真です。前列右端の男性がKさんで、その後ろに立たれていらっしゃる方が奥さんです。Kさんの隣が私ですが、お二人を通して私は中国のキリスト教の様子を幾分か知ることが出来たと言えます。

その他、数え上げればまだまだ多くの出会いがあり、福州での日々に彩りを添えて頂き、深い感謝を覚えるのです。



写真③

## 私の四川省一人旅 [46]

### 理塘の街で 6 〈神の岩山と鳥葬の丘 IV〉

田井 元子

翌朝はまずバスターミナルに向かった。朝の9時から発売されるという康定行きバスチケットを買うためだ。

相変わらず鳥葬の事も気にはなっていたが、昨日は昼過ぎに訪れて売り切れだと言われたチケットを、今日こそ確実に手に入れたかったので背に腹はかえられない。一度は諦めてしまった事で鳥葬への熱意が多少そがれていた事もあり、まずはチケットを手に入れる事を優先したのだ。

ほぼ発売開始と同時に窓口で購入を済ませ、無事に明朝発のチケットは手に入れたが、これが帰路に向かうバスの切符かと思う私の気持ちは弾まなかった。ああ～、このままずっと、まだ訪れた事の無い土地に向かって旅が続けられたらいいのに・・・。なお未練がましく壁に描かれたバスの路線図を眺めていると、やはりバスのチケットを買い求めにきたらしい昨夜の大阪のおじさんに出会った。

この後はどちらへ・・・？ お互いの旅の予定を尋ね合い、今後更に奥地へ向かおうとするおじさんを羨みながら、軽く会話してバスターミナルを後にした。

おじさんには私がこれから鳥葬場に向かおうとしている事は告げなかった。昨夜の旅行談義でも話さなかった。私が口に出せば勿論二人とも興味を惹かれ、是非一緒に見に行こうという話になるだろうとは思ったが、自分が鳥葬を見たいと願う事にもどこか後ろめたさを感じていた私には、それは旅行者同士が誘い合って見に行ったりしてはならないものの様に思われていたからだ。

バスターミナルを出ると向かいの道路でタクシーを拾った。歩いて行かれる場所にタクシーを使うのは、貧乏旅行者としては贅沢で勿体なくも思われたが、もし万が一、今日鳥葬が行われていたら・・・と考えると、だいぶ時間がおしている。ところがタクシーの運転手に「鳥葬場まで行って」と告げると、運転手はギョッとしたような顔

をして激しくカブリを振った。「嫌だ！ あそこへは行きたくない」ちょっと意外な気がした・・・

チベットの人の死生観において、人の生命で重要とされるのは魂のみ。肉体は単なる魂の入れ物という感覚なのだそう。それゆえ魂の抜けてしまった身体は既に意味を失っている物と見なされ、遺体を切り刻み鳥に施してしまう行為も自然の事として行われる・・・。そんな話をどこかで聞いていた事と、稻城で出会ったリー・ルー・ハイの「あそこは美しい場所だから今度遊びに行こう」などという言葉から、チベット族の人々には鳥葬場に対する禁忌感のようなものは存在しないのかと思えていた。だが、このタクシー運転手の様子は明らかにその場に訪れる事を恐れていた。

「判ったわ。鳥葬場まで行かなくてもいい。少し手前でもかまわないから行って」

他のタクシーを拾う手間をかけるのも面倒だった私は、運転手にそう告げるとタクシーに乗り込んだ。鳥葬場はやはり恐ろしい場所なのだろうか・・・理塘で最初に出会い2度私を鳥葬場まで運んでくれたタクシー運転手は、そこに向かう事をあまり歓迎はしていないようだったが、それ程恐れている様子でもなかった。だが後から思えば彼はチベット族ではなく、中国系の人間だったようにも思われる。

昨日の子供達の事を思った。出会った時の彼等は「鳥葬場は死者の場所だから行っては行けない」と私に告げ、そこに行く事を少し恐れていた。子供達がそのように考えるのは、当然大人が子供にそう言い聞かせているからだろう。だったら昨日私が尋ねた遊牧民達はどうかのだ？ 彼等の住まいであるテントは鳥葬場から程近く、その全体が眺め渡せる場所に立っている。もし鳥葬場が禁忌されている場所ならば、この広い草原で何故わざわざ恐れられて



街外れの小高い場所から見た、理塘市街地の風景

いる鳥葬場のそばに住居を構えているのだろうか？

通りすがりの旅人である私には、良くわからない事だらけだった。

それは個人的な感覚の違いなのかもしれないし、あるいは旅行者の目には入らない民族や階級、街で暮らす人間と遊牧民との間に何か隔たりの様な物が存在するのだろうか……。私がそんな事を考えているうちに、タクシーは見覚えのある街はずれの住宅街を通り過ぎ、草原の脇を通る細い道に入った。鳥葬場はもうすぐだ。小高い丘を道が迂回するように曲がっている場所まで来ると、運転手は車を止めた。

「鳥葬場はこの向こうだ。ここからは自分で行ってくれ」

私がお金を払うと、タクシーは逃げるように去って行った。車を降りた私は道を外れると目の前の丘を登り始めた。迂回している道を歩くより直接丘を登ってしまう方が早い。外は相変らずの真っ青な空が広がり眩い光が溢れる緑の草原だが、歩き出してからスグにいつもとは何か違う気配のようなものが感じられた。その理由はスグに判った。遠くの方からほんの微かにコツコツコツツツ……という音が響いてくるのだ。

いったい何だろう……。？ 丘を登るにつれて、その音は大きくなっていく。胸騒ぎがした。きっと何かが起こっているのだ。丘を登りきって向こう側の景色が眺められる場所にたどり着いた時、私は思わず大きく息を呑み込み、ひとりだけで声を上げていた。

いつもはガランとしていた鳥葬の丘の斜面が何かで覆いつくされている。鳥だ。大人がしゃがんだ程も背丈のある大きな鳥が、丘の斜面が黒く見えるほどびっしりと群がっていた。その少し離れた場所では人が屈み込むようにして何かの作業をしているのが見える。先程から辺りに響いているコツコツツツ……という音は、確かにそこから響いていた。

……!!!! 鳥葬だぁ~~~~~!!!!

やはり、今日がその日だったのだ。自然に丘を下る足が速くなる。だが、もう急ぐ必要は無い。私の目の前に広が

る風景の中で、その様子は一望できた。

広大な土地に跨って暮らしている民族の集合体であるチベット族の葬儀は、概ね塔葬・火葬・鳥葬・水葬・土葬の5種類に分けられるのだという。塔葬は高位の僧に対してのみ行われる特別な葬儀であり、その他の葬儀法は地域の習慣や様々な条件によって選ばれるが、標高の高いチベット高地に住むチベット人にとって、最も広く一般的なものは死後の肉体を鳥に与えて葬る鳥葬だ。

チベット文化への理解が浅い者には奇異で残酷な風習との印象を持たれがちな鳥葬だが、遺体を鳥に食べさせる行為は、多くの生命を奪い食す事によって生きてきた人間が、死後の魂が抜け出した肉体を他の生命のために布施しようという仏教的な思想が込められたものだ。日本では和訳された「鳥葬」という言葉が使われているが、宗教上の意味は魂の抜け出した遺体を「天に送り届ける」ための方法として行われており、中国語で使われている「天葬」という言葉の方がより本来の意味に近いという。

鳥葬に付される遺体は鳥葬師(天葬師)と呼ばれる専門の職人によって解体され、骨も細かく砕かれて肉に混ぜ残らず鳥に食べさせる。故人の身体は数時間の内に跡形も残さずにその姿を消してしまい、後にはほとんど何も残らない。

鳥葬がチベット広域でごく一般的な葬儀法として定着している背景には、チベットの風土や自然条件に適合した葬儀法であることも理由にあげられる。標高が高く大きな樹木の生えない風土では、遺体を火葬する薪や水葬に十分な水量の河川は得られ難く、土葬は寒冷なチベットにおいて微生物による分解が行われ難い。火も水も使わず、後に何も残さない鳥葬は、チベットの風土において環境へ及ぼす負荷の極めて低い理に適った葬儀法だ。

死して尚、存在の痕跡を残そうとする日本の葬儀や墓地のあり方に対して、自然から与えられた肉体は役目が終わったら自然に還す……。そんなチベットの弔いの形にはどこか強く引き付けられるものがあった。それをこの目で実際に確かめられる機会が得られた事に、思わず大きな喜びを感じてしまう後ろめたさを押し殺しながら、私は急ぎ足で丘を下った。

鳥葬場の斜面には群れている鳥と、かがんで作業をしている鳥葬師の他にも数人の人間が丘の上に固まってそれらを見降している様子が見えた。丘の麓では昨日子供たちと覗きに行ったコンクリートの小さな建物の前にも、数人の人間が座っているのが見える。鳥葬場の向かいの丘を早足でくだって来た私がその場にたどり着くと、そこではチベット族の男達が敷物の上に車座になって談笑している様子だ。一昨日私がこの鳥葬場に始めて訪れた時に僧侶と共に鳥葬場の下見に来ていた男も混じっていた。きっと故人の遺族か友人の集まりなのだろう。

半端な時間に一人でやって来た私に男達は怪訝そうな

目を向けていたが、それにはかまわず通り過ぎ、私は真直ぐに鳥葬場の丘に登り始めた。近くから見れば丘の上に数人で固まっている人間はどう見ても旅行者だ。私と同じように鳥葬を見に来たのに違いない。だけど彼等は何故今日が鳥葬の日だと判ったんだろう？

丘の斜面に群れている大きなハゲワシ達が待ちきれないという様に時折羽をバタつかせたり飛び上がったたりしながらも、大人しく事が始まるのを待ち構えている様子はちょっと異様な光景だ。鳥も犬のように「お預け」の感情が理解できるのだという事に少し驚いた。私が群れの脇を通っても、鳥たちは私になど目もくれない様子で鳥葬師がご馳走を振舞ってくれるのを待っている。

こちらに背を向けてコツコツコツ・・・と鍛冶屋のような音を立て作業している鳥葬師とハゲワシの間を通り抜け、私は丘の上にいる旅行者達の場所までたどり着いた。彼等の殆どは中国系のように思えたが一人だけ西洋人が混じっている。近づいてみれば、一昨日私がタクシーに乗っていた時に康定までの料金を訪ねてきたキリスト青年だった。あの翌日、康定まで500円の仕事を捕まえたと言っていた運転手のお客ははっきりこのキリスト君だと思っていたが、彼はまだ理塘に居たのだ。

「ハイ！」

近づいてきた私と目が合うと、キリスト君は片手を上げ軽く挨拶した。

「鳥葬を見に着たのかい？ 俺たちもさ…、君は一人できたのか？」

「ええ」

「少し遅かったな。もう始まっているよ。今はボディを小さく切り分けているところだ。俺たちは初めから見たぜ…こんな風にナイフを使って身体を切ったんだ」

彼は手刀で自分の腕や首を切り落とす仕草をしてみせた。少し悔しかった。人の身体が切り刻まれるところが見たかった訳ではないが、儀式としての鳥葬がどの様な手順で行われるのか、全てを見届けたかった。早々と情報入手して、あれ程鳥葬の事を思い続け、何度もこの場所に通っていたというのに、肝心なところでタイミングを逃してしまった事が悔やまれる。

キリスト君の説明によれば、今は鳥葬師が大きく切り分けられた身体を鳥が食べ易くするために、更に小さくしている段階なのだそうだ。絶え間無く響いているコツコツ…という音は骨を砕いている音だ。鳥葬師はこちらに背を向けて作業しているので、その場から彼の手元は良く見えなかった。私は回りこむようにして横から鳥葬師の仕事が見える位置に移動すると、あの日僧侶と遺族らしき男達が地面に打ち込んでいた杭が立っているのが見えた。

腰から下全部を覆う大きなエプロンをつけた鳥葬師は鉈をふるい、あの日私が腰掛けそうになっていたのと同じ様な石の上で、丹念に骨を砕き肉を刻む作業を続けてい



祈祷旗が立つ鳥葬場に連なる丘

る。既に人の形は無くしているそれは、私には動物を捌いているのと同じ光景にしか見えなかった。あたりにはほんのりと血生臭い匂いが立ち込めている。ふと学生時代にアルバイトしたスーパーの精肉売り場が思い出された。

鳥葬師の仕事を見ていて感じた事は一つだけだった。やっぱり人間だって結局は自然動物と変わらない。地球上で生かされている生き物の一種でしかないんだ…。

それにしても何という光景だろう。白い雲を浮かべた真っ青な空から太陽の光が降り注ぐこの草原で、今、私の目の前で人の身体が切り刻まれ、丘を埋め尽くす無数のハゲワシ達は行儀良く食事の時間が来るのを待っている。その傍らには鳥が人をついばむ様子を見物しようと旅行者がカメラを構えて立っているのだ…それらが当たり前の事として明るい日差しの下で淡々と行われていた。いったいこれが現実の光景だろうか？

私はキリスト君の傍らに戻ると、これまでの旅の経緯などをお互い口数少なくポツリポツリと話した。どうして彼等が今日の鳥葬を知り、ここにやってくる事が出来たのか疑問だったが、彼にはそれを尋ねなかった。以前にラサの方では鳥葬を見に行く観光ツアーのようなモノが存在している話を聞いたことがある。一般的に有名な観光地とは言えない理塘でそんな事が行われているとは考えもしなかったが、きっと宿泊していた宿の人間か誰かが、同じ様に旅行者を募って連れて来たのではないかと思われた。

見物客の中には、まるで汚いものでも眺めるようにあからさまに眉をしかめ、顔を背けている女性もいる。それ程嫌なら何故ここにいるのだろうか？鳥葬の情景をカメラに収めようとさかんにシャッターを切っている者もいた。いかにも見物に来たといった態度の旅行者達に違和感を覚えたが、やはり鳥葬が見たくてやって来た自分と彼等の何処に違いがあるのだろうか。しかしその場に一緒にいることで彼等と同化した存在になりたくない様に思えた事と、ここまで来ていながら鳥葬師の仕事を間近でじっと眺める事には、やはり後ろめたさが感じられた私

は丘を下り始めた。

先程の現地の男達が座っている場所に戻ると、私は先日出会った男に声をかけた。一見強面に見えるが男の目は優しく穏やかで、過去に親しかった友人に面影が似ていた事もあり、私は何故かこの男に根拠のない親しみのような感情を覚えていた。男は私の顔を覚えていなかったらしく不審そうにこちらを見返していたが、「一昨日あそこで会ったでしょう？」と鳥葬場を指差すと「ああ〜、あの時の・・・」とやっと合点が入った様に笑顔で頷き、私も敷物の上に座るよう勧めてくれた。

車座に座った男達は敷物の上に食物や飲み物を並べ、目の前の丘で鳥葬が行われているのを眺めながら楽しみに談笑している。それは日本人の私が抱いているお葬式の物悲しいイメージとは程遠い、まるでピクニックのような雰囲気だった。私が敷物の上に座ると、友人に面影の似た男は「お茶を飲むか？」と私に尋ね、足りないコップを補うために、腰に刺していた刃渡り30cmはあろうかという短刀を引き抜くと、自分がラッパ飲みしていたペットボトルを逆さにしてスパッと二つに切り裂いた。底が平らな方を私に渡して別のボトルからお茶を注いでくれると、自分用にはキャップを閉めたペットボトルの尖った注ぎ口を地面に差しこんで安定させた。

すごーい・・・格好いい！まるで山賊のように、大きな刀を日常的な小道具として使いこなしている男の姿に、私が思わず見惚れていると、「良かったらこれも食べな」と敷物の上に並べられていた食べ物も勧めてくれた。

思いがけず葬式の参列者の仲間入りをさせて貰えた私は、勧められるままにお茶を飲み、美味しいのか不味いのかよく判らない味付けの食物をご馳走になって、気付けば鳥葬の様子を眺めながらの不思議なピクニックに仲間入りをしていた。男達の言葉はチベット語なので彼等の会話は全く解らなかったが、私には酷く訛ってはいるものの、かろうじて私が聞き取れる中国語も話してくれたので、ほんの少しだが会話もできた。男たちの一人が私に問いかける。

「あんたはここに何をしに来たのかい？」

「鳥葬を見に来たの・・・」

私が答えると、尋ねた男が笑い声を上げた。

「聞いたか。鳥葬を見に来たんだとよ、ハハハハ・・・」

鳥葬などわざわざ見に来る程のものでもないのに、といった雰囲気だ。その男の言葉につられて仲間の男達も苦笑している。私は不思議でたまらなかった。その場にいる誰一人として悲しそうな顔をしている人はいないし、故人を偲んでいる様子も無い。鳥葬場の方へは時折目を向ける程度で、儀式の進行状態にもさして興味が無い様子だ。彼等の言葉は解らなくても、その雰囲気から話されている会話は単なる世間話をしている様にしか見え、鳥葬場に背を向け寝そべて寛いでいる者さえいた。いくら日本と文



ハゲワシの待機風景

化が違うとはいえ、こんなお葬式ってあるのだろうか？

「あなた達はここで何をしているの？」

愚問とも思える質問を隣に座っていた友人似の男に問いかけてみると

「鳥葬が終わるのを待っているのさ」

という答えが返ってきた。

「死んだ人はあなたの家族？」

「いや、友達だよ」

良く判らない様な気もしたが、納得がいったような気もした。おそらくここにいる人間は全員故人の家族ではないのだろう。彼等の誰もが悲しげな素振りさえ見せていないことから、特に親しい友人でさえないのでは・・・？と思われた。

あくまでも私の想像だが、きっと故人を失った悲しみを偲ぶ儀式のようなものは既に終わり、魂の抜けた身体を鳥に与える作業は家族の手を離れて知人に委ねられているのではないだろうか？ここでピクニックをしている男達の役目は遺体をこの場に届け、鳥に捧げられた肉体が残らず綺麗に供された事を最後に確認する事だけなのだろうと思われた。

和やかに談笑している男達の仲間に混ぜてもらい、彼等の様子を眺めているうちに、私もいつしか自分が鳥葬場にいるという特殊な緊張から解き放たれて、のんびりした気持ちになっていた。

鳥葬場からはひときわ高く鳥たちのざわめく声が聞こえてきた。

丘の方に目を向けると、肉体を刻む作業が一段落したらしい鳥葬師が細かくした肉片を鳥たちに投げ与えているところだ。この時を待ちに待っていたハゲワシ達は猛烈な勢いで与えられた食事に群がり、突付き合い飛び上がりながら押し合いへし合い激しく肉を奪い合っている。

そんな鳥たちの様子を男達は笑いながら眺め、いつしかその状態に違和感を無くしていた私も、のんびりお茶を飲みながら男たちと鳥たちの様子を交互に見比べていた。

(続く)

写真提供：ブログyoshidaさん

今回はスリランカのお酒にまつわる話をしましょう。

スリランカの人口の約70%が仏教徒、約10%がヒンドゥー教徒、約9%がイスラム教徒で残りの約11%がキリスト教徒です。仏教、ヒンドゥー教、イスラム教の各宗派ともに飲酒を認めていません。唯一キリスト教だけが飲酒を禁じていないのですが、この割合に捉われずに多くのスリランカ人達がお酒を楽しんでいます。伝統的な椰子酒とアラックを始めとして、最近ではワインやコニャックまで造られています。もちろん素晴らしく美味しいビールもあります。カシップと呼ばれる密造酒も密かに飲まれているようですが、味に当たり外れが大きい事と、健康を害する成分が含まれている恐れがあるので避けた方が無難でしょう。

スリランカのお酒で先ず挙げられるのは、椰子の雄花から採取された樹液を発酵させて出来るラーと呼ばれる椰子酒と、更にラーを蒸留して出来るアラックです。

ラーの原料になる椰子には3種類あります。先ず主にジャフナを中心にスリランカ北部で採れるパルミラ椰子、2008年から2009年に渡って紹介したジャフナ珍道中で、LTTEの支配地内でモグリのだブロク屋で飲んでいてLTTEのキャンプに泊まる破目になった原因のラーがこれです。

プラスチックの大きなバケツから小さな柄杓でコップに注がれたラーには小さな虫やら花片やら色々な物が浮いていました。ラーの表面に大きく息を吹きかけてゴミをコップの片側に寄せ、最初の一杯は目を瞑って一気に飲み干しました。

ゴミを取り除いてから飲めば良いと思われるかもしれませんが、現地の方がこうして飲んでいたので真似をしました。地元の習慣に従うのは仲良くなれる早道です。氷の1個も入れて少し冷やせば更に美味しくなると思うのですが、一杯飲んでしまえば生ぬるいラーでも酒飲みにとっては酒は酒です。多分アルコール度数は5%以下だと思いますがモグリなので計測した事なんて無いでしょう。聞いても判らないし、誰も気にしていない様です。確かなのは薄くても沢山のめば確実に酔っ払うということです。乳酸飲料の様な軽い口当たりが結構いけるので沢山飲めます。その結果としてだブロク屋に居合わせた客と時間を忘れて話し込んでしまい、LTTE支配地を通過しなくては行けない制限時間を超過してしまいました。

2番目に、キャンディを中心とした中部高原地帯ではクジャクヤシからラーが造られています。椰子林よりも茶畑の方が多土地柄なのでクジャクヤシの本数は少なく家庭内で消費する程度の量しか造られていません。時たま、少量のクジャクヤシのラーが出回るそうです。後

述しますが中部高原はスリランカのビールの一大産地なので中部高原地帯では美味しい生ビールばかり飲んでいて、クジャクヤシのラーを味わうための努力をしませんでした。他の地域のラーと味比べが出来ない事が、今となっては悔やまれます。

3番目に、コロンボからゴール・マータラ付近までの西部海岸ではココナツ椰子からラーが造られています。

商用でコロンボ～ゴール間は月に何度も行き来をしていたので、国道2号線(通称ゴールロード)沿いの多くの家には椰子の木が植えられていて、軒先に大きな樽が置かれてあるのは見て知っていました。赴任当初は、椰子から造る酒がある事自体を知らなかったし、家の前に無造作に置いてある樽に酒が入っているなんて考えてもいませんでしたから、牛乳でも入っているのだろうと勝手に思っていました。ある日、ゴールに向かって走っている時に運転手のウダヤ君に、あの樽は何だと聞いてみました。返答はラーと云う椰子から造るお酒が入っていて、ラーはアラックという酒の原料になる。外に樽を出しておけばアラックの製造業者が定期的に樽を引き取って行くのだ、と言うではありませんか。

売り物なのか、どこかで飲めるのかと質問すると、帰り道で捜してくれる事になりました。ちょっとした集落にはたいていラーを飲ませる店があるそうですが、僕が民家で出来たてのラーが飲みたいと希望したので、ウダヤ君が何軒かの民家と交渉してくれ、漸く一軒の民家に招いて貰う事ができました。部屋では中年の御夫婦と子供達が出迎えてくれ、テーブル上には何かの空き瓶に入れられた、透明感のある乳白色をしたラーと、おつまみの辛いピーナッツが置かれていました。この時が初めてのラー体験です。

冷えてはいませんが、カルピスの様な乳酸飲料の香りに酸味を効かせた味で、まだ十分に発酵していないようで少し生臭い感じがしたのを覚えています。今までに飲んだ事の無い香りのお酒でした。アルコール度数は高くはありませんでしたが、1本の空き瓶に入れられたラーを飲み終わる頃には良い按配になっていました。

ラーを飲んだ後に、裏庭で椰子の取り方を見せてくれました。何軒かの民家の裏庭が一つに成って共同の椰子林になっていました。驚いたのは、各椰子の頂上付近に太いロープを張り渡して、綱渡りの様にして隣りの椰子に移って行く事です。やはり1本の椰子の収穫を終わらせて、一端下に降りてから隣りの椰子に登り直すのは面倒なんでしょうね。この民家にはゴールからの帰り道に何度も寄せてもらってラーを飲ませてもらいました。

日本でしたことがなくて、アフリカでよくした一つに「ヒッチハイク」がある。道路の側道に立って、手を上げて車が停まってくれるのを待って、運が良くて乗せてもらえることがあれば、車に乗せてもらって目的地まで連れて行ってもらうというものだ。

アフリカでヒッチハイクだなんて、危険そうだな。私もそう思っていた。今思い出してみると意外に、ヒッチハイクを通じて出来た友人も多いことに気が付く。私は、1年くらいムロロンゴという町から首都ナイロビまで車で毎日30～40分かけて通勤していた。

移動手段は、「マツツ」と呼ばれる乗り合いバスだ。ただ、この「マツツ」の停留所には日本のように停留所名や時刻表が書かれてあるわけではない。「マツツ」が停まるのは、住宅地の近く、ある会社の前、お店の前、病院の前など、人が多く乗り降りするところで、なんとなく自然発生的に停留所になった場所だ。

乗客は、降りたいところ近くになると、「マカンガ」と呼ばれる車掌さんに手や目で合図をするか、“shukisha”(降ります)と言う。人がよく乗り降りする辺りに自分が行こうとしている目的地があるか、マツツのルート上に目的地がある限り、合図さえすれば停まってくれるので、事は至極簡単だ。しかし、自分しか行かないようなところに行くときは要注意だ。車のない人は、アフリカではまだまだ多い。

ナイロビをはじめ大都市を隈なく走るバスやタクシーやマツツも、乗客がいない場所には全く姿を見せない。そこで、人々は「ヒッチハイク」をする。徒歩で行ける距離なら何とかできるが、そうでない場合は多くの人々が日常的にヒッチハイクをしている。車が手配できなければヒッチハイクに頼るしかないのだ。その方法は簡単だ。“shimama”(停まって!)と叫びながら、車に向かって手を振ればいい。

しかし、ヒッチハイクをする時は、当然ながら、以下の点に気を付けて私なりに車と人を選ぶようにしている。

- 1) あまりにも汚い車は避ける  
(理由：途中で故障するかもしれない)
- 2) 女性のドライバーのほうがベター  
(理由：女性は女性に優しい場合が多い)
- 3) できれば子供も乗っているほうがいい  
(理由：ほとんどの割合で安全)
- 4) 1人で運転している若い男の人は避ける  
(理由：気があるのではないかと勘違いされないため)
- 5) 他に荷物を載せている。例えば、家具や動物(ヤギ、鶏、うさぎが多い)  
(理由：同乗者やモノ歓迎と言うサイン)

#### 6) 第一印象と勘

(理由：どのくらいいい人かどうかは分からないが、悪い人はなんとなく分かる)

#### 7) 交渉のやりとりの様子

(理由：例えば法外なお金を要求してくる人は避ける)

そして、条件を満たす車と人間を素早く判断し、スワヒリ語を使って、旅行者ではないことを匂わせる。結果、運よく条件にかなう車が見つかるに乗せて貰う。運転手のほうも、チップで少しでもお金になるので、大抵はいやな顔はされない。ケニアの運転手は、席を空けておくより、人を乗せてチップを貰う方が嬉しい人が多いように思う。

私が住んでいたムロロンゴというところも、環状線の側道を外れると移動手段がなく、歩くか、人の車に乗せてもらうしかなかった。知り合いになると、車に乗せてもらったついでにその人の家まで上がらせてもらって、お茶をご馳走になってから目的地まで連れて行ってもらうこともあった。買い物に行くとき、友人を訪ねるとき、旅行に行くとき、日常的に「人の車に乗せて貰う」という手段がケニアにはあるのだ。

一度、10トンタイプのダンプカーの荷台にのせてもらったことがあった。遠方に住むマサイ族の家に招待され出かけたときだ。招待者が言う、マサイ族の村の最寄りの、マツツの駐車場降りて、描いて貰った地図を頼りに歩き出したのだが、周りは人家も人影もなく、サバンナがどこまでも続いている。1時間ほど歩いた頃、ダンプカーが通り過ぎた。手を上げると、10メートルくらい進んだ所で停まってくれた。近づいてみると、ダンプの荷台に10人ほどの人がすでに乗っていた。

乗せて貰えたのはいいが、でこぼこの道走るダンプの荷台の揺れはすごかった。それぞれが自分の降りたい場所に近づくと、荷台を棒のようなものでドンドン叩いて、運転手に知らせていた。30分くらいで、ダンプが目的地の石切り場に着き、私たちはそこで降ろされた。再び、サバンナの道なき道を歩く。30分くらい歩いて、やっとマサイ族の集落が見えてきた。2時間もかかって私は友人の家に着いた。帰りは友人の車で送ってもらったが、たったの45分で、来るときにマツツを降りた停留所に着いた。

自分が車に乗っているときは逆に「ヒッチハイク」される立場になることもあった。運転手と一緒にトラックで西ケニアへ資材を運ぶ仕事を手伝った時でナイロビから西ケニアへ行った。往きは、4トントラックの荷台に材木や建築資材が満載だったので、すべてのヒッチハイカーを断りながら走った。が、ナイロビへ戻る時は、荷台は空になっていたの、いろいろな人とモノを乗せて帰った。トラック

の荷台は、鶏、野菜(にんじん、じゃがいも、玉ねぎ)、紅茶の袋など、農家の人たちがナイロビの市場で売りたいもので埋め尽くされた。地方の農家や、トラックを自分で借りて運ぶほど収穫がない農家は、品物を運転手に預け、若干の運送料を払い市場に届けて貰ったりもしている。

その時の運転手はかなり儲かったようで、私は焼肉屋さんでご馳走になり、運転手も上機嫌な様子だった。「トラックの運転は、人の役にも立つし、お金も儲かる。将来は、自分のトラックを買って運送の仕事をするのが目標」だと運転手は言っていた。

ケニアのヒッチハイクでは多少の謝礼を払うものの、根元は「助け合い文化」だと思う。ケニアに電車が走る日が来るのだろうか？来ないのだろうか？しかし、電車が走るようになったら、「ヒッチハイク」することもなくなってしまふのかと思うと、とても残念な感じがするのは、私が電車大国日本から訪れていたからだったからか？

勿論、外国人はそれなりの注意が必要なのは言うまでもないが、「ヒッチハイク」も気を付けて上手に利用すれば、楽しい移動手段でもある。

## 「テザ — 働哭の大地」(監督：ハイレ・ゲリマ)

ヴェネチア国際映画祭3賞受賞作品

(金のオゼツ賞・審査員特別賞・SIGNIS賞)

6月中旬～「シアター」イメージフォーラム(渋谷)

アフリカは人類の母が生まれたところという。満々たる水を蓄えた湖が夕焼けの赤みがかった空を映して静かに暮れて行く。そして、まだどこかねっとりとした空気が漂っているような湖面を、おそらく遠い昔から歌い継がれてきたに違いないエチオピアの民謡がゆったりと流れる。太古のままのアフリカの風景を感じさせる、そんな冒頭のシーンは、人類の母から受け継いだ私の中の、アフリカ原人の遺伝子に呼応するかのようで懐かしい。

アフリカンコネクションの竹田悦子さんが、アフリカ・ケニアでの体験を綴って下さるようになって今月号で53回目になる。すでに5年以上の歳月が経った。アフリカについての知識は恥ずかしながら「少年ケニア」を夢中で読んでいた頃と長い間あまり変化してなかったのだが、竹田さんの「アフリカの日々」の文章おかげで、アフリカが少しずつ身近になり、アフリカへの関心が深くなってきている。

しかし、それがどの程度のもだったかこの映画を見て知った。冒頭のゆったりとした自然描写のゆりかごの中でいつまでもまどろむことが許される筈はない。物語は、1970年代に医者を目指して遠くドイツに留学したエチオピア人・アンベルブルが1990年故郷の村に帰って

## 【中国文化センターの催し情報】

中国語で交流しよう！

『東京中国文化中心漢語之家』2011年5月・6月

中国語を勉強中の方、学習歴のある方、中国留学、駐在経験のある方、また日本の方と交流をされたい中国の皆様、楽しい雰囲気の中で皆様と中国の事情などについて情報交換しながら交流を深めませんか。

\*内容：当センターの中国人スタッフが毎回中国の最新事情や身近な話題を中心にお話します。

会場：東京中国文化センター

(港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F)

日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分

銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分

2011年6月2日・9日・16日・23日・30日の木曜日

18:30～20:00

- 自由参加 ●参加費無料／お茶付き
- 問合せ ☎03-6402-8168 (東京中国文化センター)
- 申し込み方法：

\*参加者氏名(同伴者がいればその方の氏名も)

\*電話番号、メールアドレス、参加希望日、を明記の上、[ccctok@hotmail.com](mailto:ccctok@hotmail.com)へお申し込みください。

くるところから始まる。希望に燃える留学時代、そして留学生仲間と志した故郷の社会変革運動の挫折と失意。戻った故郷は、留学前と変わらぬ古い因習にとらわれたままでありながら、兵士として徴発の為に子ども狩りが行われ、すでにかつての平穩はない。彼の30年間の人生(過去にフラッシュバックさせながら)を通してエチオピアの激動の歴史を私たちは知る。

題名の「テザ」とは、エチオピアの一地方の言語・アムハラ語で「朝露」と「幼少期」の二つの意味があるそうだ。「朝露」は、出かけている間に消えてしまうはかない存在ながら翌朝になれば、やはり木々の葉末に再び宿る。エチオピアの厳しい現実の向こうに、朝日を受けた朝露のように小さく煌めく「希望」の二文字が見え隠れする。

主役のアンベルブルの風貌に、東京オリンピックのマラソン大会で哲学者のような風貌で黙々と走り、他の選手の追従を許さないで優勝したエチオピアのアベベ選手を思い出した。が、何よりもアフリカ系の女性たちがいい。特に故郷でアンベルブルの帰郷を待っていた母親には、静かに物事の奥を見通す知者の、風貌と品位を感じた。自分の手元に戻ってきた失意の息子をしっかりと受け止められる母親は大きな声を上げないが決して弱くはない。

監督は、1946年生まれのエチオピア人・ハイレ・ゲリマで、現在、アメリカ合衆国ワシントンD.Cのハーワード大学映画学教授を務め、アメリカおよび西半球に移住したアフリカ系移住者の課題と歴史を多く制作していると試写会用のパンフに紹介されている。(田井)

《日中友好会館・美術館の催し》 おうこうき はんほうじゆ 王宏喜・潘宝珠 — 中国画の世界展

[http://www.jcfc.or.jp/institution/m\\_schedule.html](http://www.jcfc.or.jp/institution/m_schedule.html)

中国の歴史人物や現代の人々を通して、伝統と創造の両面から中国画の世界を描く

主催：日中友好会館・上海美術家協会 後援：在日中国大使館・他

場所：日中友好会館・美術館

〒112-0004 文京区後楽1-5-3

JR中央線・飯田橋駅下車・徒歩7分

都営地下鉄飯田橋駅下車・徒歩1分

2011年6月6日(月)～6月26日(日)(水曜日・休館)

10：00～17：00(初日は14：00～)

入場料：無料

\*6月6日(月)15：00より、お二人の制作実演があります。



王宏喜 「海を望む」

●問合せ：(財)日中友好会館・文化事業部 ☎03-3815-5085 担当：末森、小暮

わんりい活動報告 第3回「漢詩の会」 2011年05月8日

於：まちだ中央公民館・第2音楽室

今回の「漢詩の会」で殷秋瑞講師が朗読されたのは、「人面桃花」(崔護)、「題烏江亭」(杜牧)、「贈花卿」(杜甫)、「蜀相」(杜甫)、「涼州詞」(王翰)、「聞怨」(王昌齡)、「送元二使安西」(王維)と、「春夜宴桃李園序」(李白)の計8編であった。

我々になじみがあるのは、昔の漢文教科書の定番であった「涼州詞」(文末尾)と、「陽関三疊」として詩吟でよく謡われる「送元二使安西」くらいであったが、「題烏江亭」は項羽の自害に対する詩人の思い、「蜀相」は諸葛孔明を顕彰する詩と、内容は多彩であった。また、李白の「春夜宴桃李園序」は、芭蕉の「奥の細道」冒頭部分、「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」の原典であり、好評だった。このように、他所ではなかなか聴けないものを毎回一編ずつ入れていけたら面白いと思う。詩の選択に関しては、夫々の朗読を楽しんだという感想と同時に、日本人に知られた詩がもう少し多い方がよかったとの声も聞かれた。

今回は、詩に関する質問も受け、解釈を述べ合う場面もあった。が、講師に朗読後、これまで通り、作品の背景や作者の心境など簡単な説明があって、次の詩に移る前にもう一度その詩を朗読して頂きたいとの意見が出され、参加者が、講師の朗読そのものを楽しんでいることが確認できた。また、今回読みを指導頂いた詩は、「涼州詞」(下記掲載詩)であったが、四声やピンインなど正確な単語の読みも指導も含めて、繰り返し指導頂き、ある程度きちんと読めるようになって、自分自身漢詩の読みを楽しめるようになってほしいという希望も出された。

今後に向けて、次のような点を反省事項として考えたい。

- 1) 次回は10月の中旬の日曜日に開催を予定し、会場確保する。日曜日でない方がよいとの意見もあるが、早めにお知らせするので、是非ご都合をつけて頂ければと願っている。
- 2) 読んで頂く詩は、5・6編として、今までの「長恨歌」、「垓下の歌」、今回の「春夜宴桃李の園に宴するの序」のように話題性のあるものを1編入れる他、日本人に馴染みの詩や季節に合った詩による構成で、講師の朗読を楽しみたい。
- 3) 資料に拼音をつけることと、早めに申し込まれた方には資料を送り、事前に見て置いて頂けるよう心掛ける。参加者の皆様にはそれなりに楽しんで頂けているとの有難い励ましを頂いているが、今後、もう少しスマートに準備を進めて、「次回はどんな詩が聞けるのだろう」「どんな詩の指導を頂けるだろう」と期待して貰えるよう努力して行きたいと思っている。

liáng zhōu cí  
涼州詞

pútao měijiǔ yè guāng bēi  
葡萄美酒夜光杯  
yù yǐn pítā mǎshàng cuī  
欲飲琵琶馬上催  
zuì wò shāchǎng jūn mò xiào  
醉臥沙場君莫笑  
gǔ lái zhēngzhàn jǐ rén huí  
古來征戰幾人回

wáng hàn  
王翰

葡萄的美酒夜光の杯  
飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す  
酔いて沙場に臥す君笑ふこと莫れ  
古來征戰幾人か回る

(報告：有為楠)

【6月の定例会と7月号の発送日】

◆定例会：6月13日(月)13：30～

◆7月号おたより発送：7月1日(金)14：00～(共に田井宅)